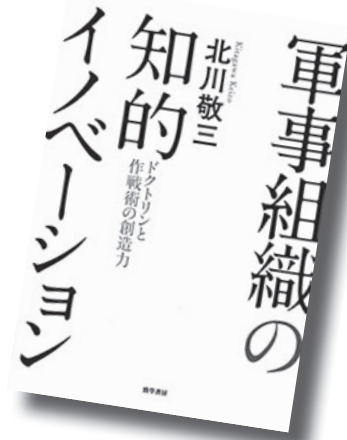


米軍の軍事戦略を  
読み解く5冊

【評者】  
同志社大学助教  
阿部亮子

① 軍事組織の知的イノベーション  
——ドクトリンと作戦術の創造力

北川敬三・著  
勁草書房、2020年

② War's Logic: Strategic Thought and the American Way of War  
Antulio J. Echevarria II・著  
Cambridge University Press, 2021年③ US Intervention Policy and Army Innovation: From Vietnam to Iraq  
Richard Lock-Pullan・著  
Routledge, 2006年④ 現代の軍事戦略入門  
——陸海空からPKO、サイバー、核、宇宙まで  
エレノア・スローン・著  
芙蓉書房出版、2019年⑤ 先端技術と米中戦略競争  
——宇宙、AI、極超音速兵器が変える戦い方  
布施哲・著  
秀和システム、2020年

二一世紀初頭は米国にとって戦争の時代である。9・11同時多発テロ以降、二〇〇一年にアフガニスタン、〇三年にイラクで軍事作戦を開始し、オバマ大統領がイラク、バイデン大統領がアフガニスタンから米軍を撤退させた。現在のロシアのウクライナ侵攻では、バイデン大統領は直接的な軍事介入を

避けつつ、ウクライナへの武器供与とロシアへの経済制裁で対応している。米国の戦争への関与の仕方や特徴を理解するには、外交や国内政治とともに、軍事戦略も理解することが不可欠である。戦争の準備と遂行という古典的な意味での戦略は、核兵器が登場すると、いかに戦争を回避するかという

文脈で議論されるようになった。しかしベトナム戦争を経て、一九七〇年代後半から八〇年代に、米軍はいま一度、古典的な意味で戦略の再定義を行う。戦略の再定義にはいくつかの特徴がある。第一に、戦略が目的と手段の關係から定義された。軍事戦略とは国家の政治目的を達成するために軍事的手

段を利用することだと説明される。第二に、国家戦略・軍事戦略・作戦・戦術からなる階層区分が用いられるようになった。①の第二部は、戦略と戦術をつなぐ作戦術が中心ではあるが、一九七〇年代後半から八〇年代の米陸軍や英国陸軍の知的改革の過程を描いた研究書である。現在の米軍の戦略を理解する上で必読書である。

②は、二〇世紀の米国の軍事戦略家の思想に着目しながら、核戦略から戦争の準備と遂行という戦略の意味の変遷を考察した研究書である。例えば、ベトナム戦争後、ハリー・サマーズが、クラウゼヴィッツの戦争の三位一体論を分析枠組みとし、ベトナム戦争での米国の戦術的勝利、戦略的敗北の要因を考察し、ジョン・ボイドとウィリアム・リンドが意思決定と機動の迅速さが敵を崩壊させると主張したことが描かれる。

軍の戦略の再定義が、軍の行動原理の変化にとどまらず、米国の介入政策にまで影響を及ぼしたことを明らかにしたのが、③である。レーガン政権時のグレナダ侵攻での成功とレバノンでの失敗、陸軍のドクトリン、そしてサマーズのベトナム戦争での分析——米軍は戦術的には勝利したが戦略的に敗北した——が、軍事介入において明確な政治目的と軍事目標を設定するように求めたワインバーガー・ドクトリンに及ぼした影響が、軍と政策の資料分析から実証される。米国の軍事介入の事例研究を通して筆者が指摘する、ワインバーガー・ドクトリンと陸軍の問題点は、評価が分かれるとはいえず、アフガニスタンやイラクでの米国の戦略、バイデン政権の介入の原則、そして、軍に任務を付与する際の政治の姿勢を考察する重要な出発点であろう。

④は古典から現代に至るまでの欧米の軍事戦略の系譜を包括的に説明した概説書で、シーパワー、ランドパワー、エアパワー、核戦力、非正規戦、平和維持、軍事トランスフォーメーション、サイバー戦争とスペースパワーの各領域の思想的変遷や定義、特質が描かれる。とりわけ、米海軍が、破綻国家や大量破壊兵器の拡散から中国やロシアの接近阻止・領域拒否の脅威へと、冷戦後の戦略環境の変化に応じて、制海と戦力投射のバランスを柔軟に設定したとの指摘は、現在の米国の海洋戦略を理解する上で重要だろう。

最後に、テレビ朝日ワシントン支局長の著者が、技術に着目しながら、米中の戦略的競争の現状を描いたのが⑤である。海上、宇宙、人工知能、極超音速兵器の分野における米中の技術開発の現状を、技術に関する専門的知識を有しない読者にも理解しやすい文章で、丁寧にまとめている。●